博士論文要旨

同人雑誌『月映』の青年画家たち

―生と死の分有による共同的創造―

立命館大学大学院先端総合学術研究科
先端総合学術専攻一貫制博士課程
ハシモト　マサコ
橋本　真佐子

明治末期から大正時代にかけて日本の近代化が進展し、文学と美術をめぐる状況は大きく変化した。「国民国家日本」の曙をひらいた明治第一世代に変わって、明治第二世代が日本の様々な分野で活躍する時期を迎えていた。文学の世界では、文壇に異を唱える流派も起こり、言説が入り混じるなかで近代文学の形が整ってきた。詩歌の世界には北原白秋や三木露風が現れ、青年読者に歓迎された。その中からは、口語自由詩を完成させた萩原朔太郎や、その盟友となる室生犀星ら、次世代を牽引する詩人たちも育ってくる。美術界では、「文展」の権威が増して大規模化する一方で、後期印象派など同時代の西洋美術の動向が雑誌の図版と記事で伝えられ、旧来とは異なった表現をめざす青年画家たちに刺激を与えた。出版印刷の機械化が進む一方で、手仕事として衰退しつつあった「版」の技術を芸術としてみいだす「創作版画運動」がおこった。

このような時代において、同人雑誌や小展覧会を舞台にして、自主的な創作活動を行う人々が、おもに都市部において続出する。彼らは、さまざまなジャンルを横断して芸術や文学を愛好し、仲間内でよりあつまりながら表現主体として形成しつつある「青年画家」であった。本論文であつかう同人雑誌『月映』も、そのような「青年画家」たちの成果物の一つである。田中恭吉（1892［明治25］-1915［大正4 ］年）・恩地孝四郎（1891［明治24］年-1955［昭和30］年）・藤森静雄（1891［明治24］-1943［昭和18］年）の東京美術学校の三人の画学生たちは回覧雑誌『密室』、私家版作品集私輯『月映』の制作をへて、公刊『月映』を出版し、創作版画作品と詩歌を発表した。『月映』は、『方寸』の山本鼎らによって牽引された創作版画運動の草創期の成果として、版画史上で歴史的な意義が認められている作品集である。近年においては、田中恭吉と恩地孝四郎に関する作家論的な研究が蓄積とあいまって、『月映』の活動の全体像が概ね明らかになる一方で、その中心にあった彼らの三人の緊密な関係については、その意義がまだ十分に考察されていない。

そこで本博士論文では、田中恭吉・恩地孝四郎・藤森静雄の三人が、なぜ雑誌を創作活動の媒体に選んだのか、そこでの共同的創作活動が各々の芸術をどのように拡げたのか、そして極めて短い期間であった雑誌の創作活動が、芸術のみならず、彼らの生にとってどのような意味をもたらしたのかを詳らかにしたい。その際、「青年画家」という概念を切り口とし、『月映』三人の絆と、絆のなかでそれぞれが生と死への観照を深めた点に注目する。

本研究は以下の手順ですすめる。まず、『月映』にやや先行する時代と同時代に、芸術家が出版

物を通じて行った芸術活動に目を配りつつ、『月映』の三人が創作版画という芸術方法を選択し、それを雑誌出版というかたちで発表した理由をさぐる。つぎに、『月映』の三人が、『月映』に先立ってなした回覧雑誌『密室』の活動を通じて、表現の主体を獲得していく様子を追う。回覧雑誌『密室』誌上で、人生や自分の価値に対する煩悶を共有したことは、『月映』において、三人の同人たちが内面世界を凝視した表現を生み出すことを促進した。そのなかでも、田中恭吉がこの活動の最中に結核を発病したことが、三人の関係と創作のあり方を方向づけることになった。そして、『月映』の三人が創作版画を始め、試行錯誤によって作成した自画自刻自摺版画集の私輯『月映』を分析することで、彼ら三人の友情の深化と集合体としての創作活動のあり方を分析する。これらの議論を踏まえて、公刊『月映』を、編集と造本の工夫、版画作品、詩歌と章を分けて分析する。まずは、のちに装本家としても活躍する恩地孝四郎が、公刊『月映』を書物として芸術的価値のあるものにするために、編集や造本をどのように工夫したかを解明する。その次に、『月映』の版画作品を分析し、彼ら三人の西洋美術受容と創作版画への転換の様態を追う。さらに、公刊『月映』の文学作品を中心に作品分析を行い、画家の卵であった彼らにとって、詩歌を作り、公刊『月映』に発表することはどのような意味があったのかを考察しつつ、公刊『月映』誌上で目指された絵画と文学の交流を、作品内外から明らかにする。そして、『月映』のあり方に関する議論と、公刊『月映』の特別号である第IV輯「死によりて挙げらるる生」を取り上げた考察で作品読解の議論を挟み込む構造を取って、最後に彼らが死を「分有」し、哀悼の念によって結びついていたことが、創作活動を駆動していたことを改めて確認する。そののちに、公刊『月映』の終刊後について触れ、決章へと至る。

本研究の結論は以下の通りである。『月映』の三人は、美術学校的な芸術のあり方や画壇の権威に反発し、自分たちのための芸術活動として創作版画を選び、雑誌という形で発表した。彼ら三人は、国家や社会が期待する姿に背き、自己の価値や人生に悩む「煩悶青年」であり、回覧雑誌『密室』の活動を通じて仲間の間で「自己」への思索を反復・共有していた。そこでの経験は、『月映』の三人が自己の内面を凝視し、それを創作版画での内面世界を表現していく基盤を形作った。田中恭吉・恩地孝四郎・藤森静雄は、創作版画の技法をさまざまに試し、共同で創作に取り組むことで友情を深めたが、結核を発病した田中恭吉の存在は、『月映』の三人のあいだで死の予感を分かち合い、生の表現を探求していくことを促した。表現の主体としての『月映』の三人は、大衆画家竹久夢二の追随者となり、『白樺』の「後期印象派」や世紀末芸術を積極的に吸収しながら、それぞれに内面世界を表現していくことに挑戦した。公刊『月映』には創作版画とともに詩歌が掲載されたが、言語作品は版表現の代替物ではなく、両者が誌面であらたな芸術性を開くために必須だったことが、版画と詩の作品分析から明らかになった。しかも、結核患者である田中恭吉の詩歌に加えて、藤森静雄の詩があることで、公刊『月映』の文学性は結核文学にとどまらない膨らみを持ち、『月映』の詩歌がそれぞれの立場から内省した生と死を表現する場所であることを読者に印象づけることになった。公刊『月映』第IV輯「死によりて挙げらるる生」は、もともと藤森静雄の妹の哀悼号として作られた特別集であったが、そこで共同的な弔いが創作活動としてなされたことが、『月映』の三人の絆は強化された。公刊『月映』の終刊と同じくして田中恭吉は死去し、『月映』の活動は終わる。その後の恩地孝四郎と藤森静雄は、ブランクを挟みながらも版画制作を継続し、版画家として成長していった。以上のことから、『月映』は、創作版画と文学が共鳴する空間であるにのみならず、死を「分有」した絆でむすばれながら生と死を凝視して行った共同制作友情と生の証であると結論づけた。

Abstract of Doctoral Thesis

Collaborative Creativity in *Tsukuhae* Enhanced by Sharing Life and Death: A Coterie Magazine of Creative Woodblock Prints and Poems by Young Artists in Modern Japan

Doctoral Program in Core Ethics and Frontier Sciences
Graduate School of Core Ethics and Frontier Sciences
Ritsumeikan University

ハシモト　マサコ
HASHIMOTO　Masako

In the early 20th century, Japan experienced a wave of modernizations in literature and the arts by embracing Western artistic movements and works. Japanese artists and literary peoples, especially in the young generations, pursued their own new expressions and showed their passions thought holding small exhibitions or publishing small magazines independently. While the rapid industrialization led to a decline in hand-craft-printing techniques, a modern artistic movement in woodblock prints, known as creative woodblock prints movement or "*sosakuhangaundo"* occurred and attract especially young artist's interest. The purpose of this study is to show the significance achieved by collaborative artistic activities in *Tsukuhae*, which consists of creative woodblock prints and poems made of young artists. This coterie magazines were published by the three young students of the Tokyo Fine Arts School from 1914 to 1915. The young artists, — Kyokichi Tanaka (1892-1915), Koshiro Onchi (1891-1955), and Shizuo Fujimori (1891-1943) —forged a deep bond as they contemplated the profound questions of life and death. They sought to express and share these existential reflections through their magazine. The research explores their activities of these artists, placing a focuse on the interactions with one another. It analyzes various aspects such as artworks, poems, editing methods in *Tsukuhae*, extending its consideration to the earlier hand-made circulation, magazine, *Misshitsu*, and to all -hand-made private version of *Tsukuhae (shishu Tsukuhae).*

The results indicated that creating woodblock prints and publishing magazines signified their challenging sprits to prestige of academic arts world. In addition, these activities served not only as external critiques but also as a means for them to explore their inner worlds and self-awareness as they communicated through their works. They eagerly adopted new western arts movements to produce their own works then they resulted in the cutting-edged modern expressions in Japan at that time. Kyokichi Tanaka's battle with tuberculosis and his awareness of

impending mortality further strengthened the bond among the three artists. Creating creative woodblock prints and publishing *Tsukuhae* served as evidence of their profound friendship enhanced by sharing reflection to life and death during their young days. This bond continued to influence their later artistic careers, particularly in the case of Koshiro Onchi and Shizuo Fujimori, who both became noted artists in the realm of woodblock prints. The study concludes that volunteer arts activities with rebellious sprits in *Tsukuhae* shows not only the passion of youth but also achievements of expressions and activities produced by the bond among the three young men joined by serious attitudes towards life and death.